

せいけん
詩集

第三十二篇

作：近藤せいけん

「幸運 その一」

小田急線本厚木の駅に 一人の男が

降り立った 改札口を通り 賑やかな

駅前のロータリーのベンチにすわり

ぼんやり 道ゆく人を眺めていた

「あ、あゝ 二〇数年ぶりだ 昔と変わらないな」と

ひとりつぶやいた

「あの頃は 若かった 月日の過ぎるのはあつ、という間だ

俺 もう 五十を過ぎた」

「あの頃は毎日が楽しかった 青春だったな」

目をつぶり 若かりし頃を思いうかべていた

ふつと目を開ける すると隣に 一人の若者が

腰をおろしていた その若者を見つめる

「あつ、お前は 昔の俺 そんなバカな」

「これは夢を見ているのだ 俺は疲れている」

若者がおもむろに口をきいた

「私はあなたですよ 私は若い頃のあなたです」

「え、そんな」 「質問があります」

「今のあなたは 幸せですかそれとも 不幸ですか」

「答えて 下さる」